ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

ある「モラルハザード」
（銀行の支払滞留）

今週初め、当地で司法書士事務所を開業して２５年になるＳ氏から驚くべきことを聞いた。話題が銀行関係に及んだ時、彼は突然怒りを露わにして「あの銀行は非道い。我々をなんと思っているのか」と言い出した。その話の内容は、かつて銀行で仕事をした私にとっても俄に信じられるものではなかった。何と、銀行に請求した代金が１年以上経っても支払われず、溜まりにたまって請求代金が２百万近くまで膨らんでしまったと云うのだ。しかも、その代金の殆どが単価の低い謄本請求代だと云う。

銀行は不動産の登記事項などを調べる時、法務局で登記簿謄本をとる。自分でとるのが面倒なこともあり大概は司法書士事務所に依頼する。その銀行もＳ事務所に時々謄本の依頼をしてきたという。Ｓ事務所は依頼された謄本をとって請求書を沿えて銀行に持って行く。普通であれば日を置かずして代金が事務所の口座に振り込まれる筈だが、いつになっても振り込まれない。

再三の請求で昨年末までにまとめて払うということになったが、未だに入らない。怒り心頭に発したＳ氏はその銀行からの依頼を全て断わる決意をし、行動に移した。場合によれば本部経営陣に直接訴えることも辞さないとまで云う。仕事面で銀行と密接な関係をもつ司法書士がこのような覚悟を決めるのは極めて異常である。

私は頭が混乱した。何故、こんなことが起こるのだろうか。銀行内部で一体何が起こっているのだろうか。

謄本をとるだけの仕事というからＳ事務所サイドに問題があったとは思えない。問題は銀行内部にある。厳しいコスト削減の影響でこの種の予算が全くとれないという現実があるのかもしれない。しかし、仮にそうだとしても、自身で法務局に行って登記簿の閲覧をすれば済む話である。それを法書士に頼んでおいて払わないのは、「司法書士は銀行で喰っているので少し位迷惑かけても構わない」とでも思っているからか。Ｓ氏に云わせれば「ここ１年、謄本を取ること以外仕事は一切ない」ということだが、推測するに多分そんなところだろう。

ここまで読んで貴方は何を思っただろうか。

私がこの代金未払い問題をここで取り上げたのは、単に企業間取引の未払い問題で済ますことができないと思ったからである。「特定の銀行の危機的状況」というだけでなく「日本の銀行の危機」を示すものと感じたのだ。大袈裟と言われるだろうが、そう感じてしまったのである。

私などが言うまでもなく、銀行は決済機能を担い、金融仲介機能と信用創造機能によって日本の経済システムの中核に位置している。間接金融中心の経済にあっては、銀行の信用こそが最も重要な経済インフラである。その銀行が最低限保持すべき商業倫理まで喪失している。この事実は重く厳しい。

伝え聞く所によると、世界の工場として急激な経済成長を続けている中国にあっては、企業の財務担当の腕の見せ所は「いかに支払わないか」「いかに支払を遅らせるか」にあると云う。経済成長下、銀行の抱える実態不良債権比率が比類なき高率にあるという事実がその辺の事情を語っているように見えるが、それは文化の問題だと思っていた。中国経済に弱みがあるとすれば、そうした経済倫理に反することがまかり通る文化的風土ではないかと考えていたが、そうとばかりは云えないような気がしてきた。

日本だって威張れたものじゃない－そんなふうに思えたのだ。

バブル崩壊が鮮明になった９１年頃から現在に至るまで様々な経済的不祥事が露出した。見たくないような事実や現実を厭というほど見せつけられてきた。そして、その中心にはいつも銀行がいた。そうしたことが、銀行員の使命感や倫理感を削ぎ落としてしまったのだろうか。銀行の支払滞留という事実は、事態がそこまで悪化していることを推測させる。

今週２４日、経済同友会の氏家副代表は記者会見で「モラルハザード（倫理の欠如）はすでに起こっている」と述べたが、より正確には「モラルハザードはここまできてしまった」と云うべきだったと思う。

不良債権はいずれて無くなる。しかし、傷つき失われたモラルはまた蘇るだろうか。堅固なモラルこそ日本経済最大の強みだったと思うのだが。

《複製・転載等はご連絡下さい》

TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp